

Title	通文化比較調査および国際比較調査の方法論的課題： 調査の等価性の問題を中心に
Sub Title	Methodological Problems in Cross-Cultural and Cross-National Survey Research
Author	真鍋, 一史(Manabe, Kazufumi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2004
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.77, No.1 (2004. 1) ,p.504(75)- 538(41)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川合隆男教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20040128-0504

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

通文化比較調査および 国際比較調査の方法論的課題

—— 調査の等価性の問題を中心に ——

真 鍋 一 史

1. はじめに
2. 等価性の概念
3. 解釈上の等価性
4. 手続上の等価性
5. 等価性を確立するための諸方法
6. おわりに

1. はじめに

現代の社会科学にとって、最も大きな出来事の一つをあげるとするならば、それはさまざまな文化や国家を対象とする大規模な比較調査の出現ということであろう。社会科学の領域において、比較研究というアイデアは決して新しいものとはいえない。しかし、比較というアイデアを実証科学として確立させるための研究態勢や研究環境の発展ということになれば、それはやはり近年——せいぜいここ数十年——になってからのことといわなければならない。では、そのような発展の具体的な内容は何かというと、それはつぎの二点にまとめられるであろう。

(1)このような比較研究を可能にした「調査方法——とくにサーベイ・リサーチ (survey research) のさまざまな技法——」の開発と「調査環境——標本抽出台帳など統計資料が整っているか、調査実査が可能か、データ集計が信頼できるかなど——」の整備と、(2)このような調査で収集されたデー

データの整理・保管・活用を担当する「データ・アーカイブ (data Archive)」の設立、というのがそれである。いうまでもなく、(1)をとおして、社会科学の領域のさまざまな仮説が地球規模で初めて実証的に検証される道が開かれてきたのであり、(2)をとおして、このような検証の機会が広く研究者／社会人に提供されるようになり、さまざまな命題とデータが多くの人びとに共有されることになってきた——命題とその検証を可能にするデータが文字どおり人類の共有財産になってきた——のである。

さて、比較研究の態勢と環境の整備にともなって、さまざまな文化や国家を対象に、さまざまな調査研究がなされるようになってきた。それにともなって、そのような調査の方法論をめぐって、活発な議論が展開されることになる。その中心的なテーマは、「調査の等価性 (equivalence)」という問題であった。筆者はすでに、この研究領域の文献研究にもとづいて、国際比較調査のさまざまな問題点を、とくに測定の等価性ということに焦点を合わせ、①測定そのものの問題、②測定に対する社会の変化の影響の問題、③質問文の翻訳の問題、④データ解析の問題、に分けて検討を行った。今回の文献研究は、まさにその同じ線上にあるものといえる。では、その相違点はというと、それは今回の文献研究では「国際比較調査 (cross-national survey)」から「通文化比較調査 (cross-cultural survey)」にまで、その射程を広げていったという点である。いうまでもなく、調査の方法論的な議論の展開にとって、そのほうがより生産的であると判断したからにほかならない。このような文献研究にとっては、まさに「先達はあらまほしきかな」である。こうして、この文献研究は、Timothy P. Johnson, *Approaches to Equivalence in Cross-Cultural and Cross-National Survey Research*, *NACHRICHTEN SPEZIAL* No. 3 (ZUMA, Mannheim, Germany, 1998) にもとづくものである。このような文献の渉猟とそれにもとづく斯学の現状の概観こそが、いわゆる「cumulative knowledge」の出発点となるのである。

2. 等価性の概念

これまで、社会調査 (social survey) あるいはサーベイ・リサーチの方法論は、主に単一文化／単一国家のセッティングのなかで展開されてきており、したがってそのような方法論を通文化比較あるいは国際比較のコンテキストのなかに置くならば、さまざまな問題が出てくる。そのような方法論の検討はこれまで十分になされてこなかった。それはそれとして、しばらく置いたままで、比較というアイデアが実行に移されてきた。そこでは「概念 (concept) と測定 (measurement) の等価性」ということが暗黙の「前提 (assumption)」とされてきたのである。比較調査に実際に携わる研究者・実務家は、もちろんこのことには早くから気づいていた。しかし、では、この等価性という問題を具体的にどのように解決するかについて、何らかの合意形成 (consensus) がなされてきたかという点については誰もかペシミスティックにならざるをえない。ここでは、通文化比較と国際比較を、「比較研究」という共通の視座のなかで、ひとまとめにして取りあげている。ところが、じつはそれぞれにはそれぞれの研究の系譜があり、通文化比較はすでに一世紀を越える研究の歴史を持っているのに対して、国際比較の研究はどちらかといえばその歴史は浅い。そのような時間差はありながらも、いずれについても近年になって多くの実証的研究が生み出されてきた。繰り返しになるが、さまざまな実証的な調査研究が実施されながら、その方法論に関する合意形成はなされていない。では、それはなぜか。このような疑問に答えるため、Timothy P. Johnson (1998) は、通文化比較調査および国際比較調査の領域における広範な文献研究にもとづいて、「等価性」の概念とその確立の方法論の整理を試みる作業に取り組んだのである。結論を先取りしていえば、等価性という概念の豊饒性ととも、それを確立しようとする方法論にも多様性が生み出されてきたということである。いいかえれば、等価性の概念と方法論は、いぜん「拡散 (divergence)」の方向に進んでおり、いまだ「収斂 (convergence) の方向」にまとまってきていないということである。

では、このような結論に至る Johnson の文献収集の方法はどのようなものかという点、それはつぎの三点にまとめられる。

(1) 通文化比較／国際比較の調査研究に関する利用可能な文献を広く収集する、

(2) 個別科学 (discipline) の観点からするならば、人類学、ビジネス・アドミニストレーション、コミュニケーション・サイエンス、人口学、経済学、マーケット・リサーチ、政治学、精神医学、心理学、社会学などの領域の文献を収集する、

(3) 過去40年近くまでさかのぼって文献を収集する、というのがそれである。

こうして収集された文献から、等価性のさまざまな側面・属性・次元を表現する用語を抽出するならば、それはじつに50を越えるものとなる。これらの用語のうち「通文化的等価性」(cross-cultural equivalence)と「文化的等価性 (cultural equivalence)」の二つは、等価性のさまざまな側面・属性・次元を意味するさまざまな用語のいわば一般的あるいは総称的な表現形態ともいうべきものである。しかし、このような「拡散の方向」に対して、どのようにして「収斂の方向」を見出していくことができるであろうか。それは、概念の「豊饒性」という問題の解決策の模索といえる。この点に関しての Johnson の提案は、以上のような等価性をめぐるさまざまな用語を、「解釈上の等価性 (interpretive equivalence)」と「手続上の等価性 (procedural equivalence)」という二つの領域 (domain) に整理するというものである。では、それぞれの領域はどのように説明され、どのような用語がそこに整理され、そのような整理にはどのような意味があるのだろうか。そのような側面についての議論がつぎの課題である。

3. 解釈上の等価性

等価性をめぐるさまざまな用語については、その表現形態上の相違にもかかわらず、いくつかのものについては、ある共通の意味内容が包含されてい

るということがわかってきた。その共通の意味内容の一つが、「解釈上の等価性」と呼ばれるところのものである。それは、さまざまな文化を越えて、ある抽象的 (abstract)・潜在的 (latent) な概念の意味内容に共通性 (commonality)・類似性 (similarity) が存在するということに焦点を合わせる。それは「意味の等価性」という側面ということもできる。

そこで、以下において、いわば「解釈上の等価性」という表札のもとに整理される等価性のさまざまなタイプ (type) あるいは形態 (form) をあげてみる。

・「概念的等価性 (conceptual equivalence)」

Hui と Triandis (1985) は、「概念的等価性」は通文化比較調査の必要条件 (necessary condition) であると考えた。

Okazaki と Sue (1995) は、ある概念が複数の文化的諸集団 (cultural groups) において同一の意味 (identical meaning) を持つならば、そこには「概念的等価性」があるというコンテキストでこの用語を用いた。

・「機能的等価性 (functional equivalence)」

意味の一致 (concordance of meaning) ということが「機能的等価性」の中心的な必要条件 (central requirement) であるとされている。

Van de Vijver と Poortinga (1982) は、「機能的等価性を持つ概念は、質的な意味 (qualitative sense) においては普遍的 (universal) であるが、量的な意味 (quantitative sense) においては必ずしもそうではない」と述べている。

Pareek と Rao (1980) は、「機能的等価性」について議論する場合、「文化を越える意味の共通性 (commonality of meaning)」ということに焦点を合わせる。

Singh (1995) は、ある概念が異なる社会において類似の機能 (similar function) を果たすならば、そこには「機能的等価性」が存在すると論じている。

・「定義的等価性 (definitional equivalence)」

Eyton と Neuwirth (1984) は、「定義的等価性」という用語を用いるが、

それは以上の用語の意味内容にきわめて近いものといえる。

- ・「意味的等価性 (semantic equivalence)」

Flaherty et al. (1988) は、ある言語からほかの言語に翻訳された調査の質問項目 (survey items) が、文化を越えて同一の意味を示すという場合に、この用語を用いた。

- ・「言語的等価性 (linguistic equivalence)」

Prince と Mombour (1967) は、翻訳された後も、調査の質問紙 (questionnaire) がはじめの意味 (original meaning) を正確に伝えるものとなっている場合、そこには「言語的等価性」があると定義した。

Iyengar (1993) は、複数の言語で作成された質問紙がそれぞれ妥当性 (validity) を持っているのは、「言語的等価性」があるからだと考えた。

- ・「翻訳等価性 (translation equivalence)」 (Hui と Triandis, 1983)
- ・「意味等価性 (meaning equivalence)」 (Prince と Mombour, 1967)
- ・「文脈的等価性 (contextual equivalence)」 (Elder, 1973)

これらの用語も、同じように文化的諸集団を越える「構成概念の解釈の類似性 (similarity of construct interpretation)」というところに焦点を合わせている。

- ・「慣用語法的等価性 (idiomatic equivalence)」

Sechrest et al. (1972) は、調査の質問項目に関して、文化的諸集団を越えて同じ慣用語法的な表現 (idiomatic expression) が用いられる場合の等価性について論じている。

最後に、以上において取りあげなかった類似の用語をひとまとめに示しておきたい。

- ・「経験的等価性 (experiential equivalence)」 (Sechrest et al., 1972)
- ・「理論的等価性 (theoretical equivalence)」 (Teune, 1977)
- ・「本質的等価性 (substantive equivalence)」 (Czudnowski, 1976)

これらの用語は、いずれも、文化的諸集団を越える社会過程 (social process) —— 「社会内で行われるもろもろの相互行為の全体的な進行と推移」 (森博「社会過程」『新社会学辞典』有斐閣、1993年、p. 605) —— の類似性とい

うことに注目している。

4. 手続上の等価性

「手続上の等価性」という表札のもとに整理されるさまざまな用語は、その意味内容の明細化のレベルに違いがあるものの、いずれも通文化比較のための測度 (measure) や手続 (procedure) を問題にしている。しかし、ここでも、同じ表札のもとに整理されるさまざまな用語が、さらにいくつかのタイプ (subtype) に分けられる。

(1)測定 (measurement) の通文化的な一貫性 (consistency) を問題にする用語例

- ・「正確な等価性 (exact equivalence)」(Verba et al., 1978)
- ・「辞書的等価性 (lexical equivalence)」(Warwick と Osherson, 1973)
- ・「文字通りの等価性 (literal equivalence)」(Frijda と Jahoda, 1966)
- ・「逐語的等価性 (verbal equivalence)」(Adams-Esquivel, 1991)
- ・「語彙等価性 (vocabulary equivalence)」(Sechrest et al., 1972)
- ・「指標等価性 (indicator equivalence)」(Küchler, 1987)
- ・「刺激等価性 (stimulus equivalence)」(Anderson, 1967)
- ・「テキスト等価性 (text equivalence)」(Alwin et al., 1994)

これらは、さまざまな言語集団 (language groups) を越える、調査の質問項目のワーディング (wording) の類似性 (similarity) ということに焦点を合わせている。

このようなグループと関連した用語例として以下のようなものもある。

- ・「形式等価性 (formal equivalence)」(Frey, 1970)
- ・「道具等価性 (instrument equivalence)」(Singh, 1995)
- ・「項目等価性」(item equivalence) (Hui と Triandis, 1985)
- ・「測定等価性 (measurement equivalence)」(Leung と Drasgow, 1986)
- ・「計量心理学的等価性 (psychometric equivalence)」(Hulin, 1987)

- ・「統語論的等価性 (syntactic equivalence)」(Kohn と Slomczynski, 1990)
- ・「文法-統語論的等価性 (grammatical-syntactical equivalence)」(Schrest et al., 1972)

これらの用語は、文化的諸集団を越えて、機械的に (mechanically) 同一の手法が適用されるという点を強調している。しかし、このような等価性を無批判的に (uncritically) 仮定することの問題性ととも、このような等価性を形式的に (formally) 証明することの困難性については、さらに議論がなされなければならない。

(2)調査対象者 (sample) の通文化的な比較可能性 (comparability) を計量心理学的に捉える用語例

- ・「計量等価性 (metric equivalence)」

文化的諸集団を越える測定において、調査の質問項目が類似の統計的特性 (statistical properties) を示すならば、このような等価性が存在するという (Hui と Triandis, 1983; Okazaki と Sue, 1995; Straus, 1969; Van de Vijver と Leung, 1996)。

- ・「測定単位等価性 (measurement unit equivalence)」

これは、ある測定のスケール (measurement scale) が、文化的諸集団を越えて同一であるときに成り立つといわれる (Van de Vijver と Leung, 1996)。

- ・「構造的等価性 (structural equivalence)」

文化的諸集団を越えて収集されるサーベイ・データが、因子分析などの技法をとおして、同じデータの構造 (data structure) を示す場合は、この意味での等価性が存在すると考える (Van den Vijve と Leung, 1996)。

- ・「因子等価性 (factor equivalence)」

これは、因子分析を用いた場合のデータの構造の類似性を意味するが、とくにそこでは因子の数 (number of factors) が文化的諸集団を越えて同じかどうか問題とされる。

- ・「因子的等価性 (factorial equivalence)」

ここでは、文化的諸集団を越えて因子負荷量 (factor loading) が類似しているかどうかには焦点が当てられる。

・「測定等価性 (measurement equivalence)」

これは、さらに厳密な条件を課すもので、因子負荷量 (factor loading) と誤差分散 (error variance) の両方が、文化的諸集団を越えて同一である場合を想定している (Singh, 1995)。

・「直接的等価性 (direct equivalence)」

・「相対的等価性 (relative equivalence)」

Frey (1970) は、通文化比較のための測度 (measure) が、ある文化に固有の基準 (culture-specific criteria) といったものとは無関係に、それぞれの文化的諸集団において直接に比較可能なものである場合を「直接的等価性」と呼び、比較に先立って別の基準 (criteria) によって標準化 (standardize) しておかなければならない場合を「相対的等価性」と呼んだ。たとえば、後者の例としては、「年収 (annual income)」などがある。年収は国際比較が可能な測度であるが、しかしそれも国ごとの別々の単位が単一の基準によって標準化されて、はじめて可能なものとなるのである。

(3) 調査の質問項目／調査のスケールの通文化的な妥当性検証 (validation) という点で関心を共有する用語例

・「概念操作化等価性 (construct operationalization equivalence)」

Hui と Triandis (1983) によれば、ある測度が文化的諸集団を越えて、ほかの諸変数との関係において、一つの一貫したパターン——理論的に導き出されるパターン (theoretically derived pattern) ——を示すとすれば、その測度はこのタイプの等価性を持つという。

ほぼ同じ意味内容を持つ用語としてつぎのものがある。

・「概念等価性 (construct equivalence)」 (Singh, 1995)

・「関係的等価性 (relational equivalence)」 (Ellis et al., 1989)

さらに、以下のような用語もある。

・「基準等価性 (criterion equivalence)」

ある変数が、同じ概念のほかの測度と、文化的諸集団を越えて、一貫して関連しているということに、この用語は言及するものである (Flacherty et al., 1988)。

- ・「内容等価性 (content equivalence)」

この用語も Fraherly et al. (1988) が用いたものであり、それはある測定のスケールを構成するいくつかの質問項目が、それぞれの文化的コンテキストのなかで、理論的な領域 (theoretical domain) を適切に表しているかどうかに関心を合わせる。

- ・「心理学的等価性 (psychological equivalence)」

Eckensberger (1973) によって、ほとんど同じ意味で用いられた用語である。

- ・「レスポンス等価性 (response equivalence)」

Frey (1970) は、調査のレスポンス (回答) が複数の言語で表現される場合の、複数のバイリンガルの回答者から得られるレスポンスの類似性ということによって、この用語を定義した。

- ・「状況的等価性 (situational equivalence)」 (Anderson, 1967)

- ・「技法的等価性 (technical equivalence)」 (Flaherty et al., 1988)

これらの用語では、調査が実施される場合の諸条件、とくにここではデータ収集 (data collection) の方法の類似性ということがポイントとなっている。

- ・「動機的等価性 (motivational equivalence)」

Triandis (1972) は、さまざまな文化的背景を持つ回答者が、調査に回答する場合、どのくらい類似の動機づけを持っているかを問題にした。

(4) 「手続上の等価性」という表札のもとでのもう一つの用語例

- ・「操作的等価性 (operational equivalence)」

Prince と Mombour (1967) の定義はやや曖昧である。Mohler et al. (1996) は、ある測度がほかの測度によって代替可能である——つまり統計的分析 (statistical analysis) の結果にどのような差異も生じさせない——な

らば、その測度は「操作的等価性」を持つとしている。

(5) 「解釈上の等価性」「手続上の等価性」を区別しない用語例

この用語例としては、つぎの二つの対照的な例がある。

・「完全な等価性 (complete equivalence)」

Verba et al. (1978) によれば、「完全な等価性」というのはどこまでも仮定的なもの (hypothetical achievement) であって、それが実際に達成されることはないであろうという。

・「信頼できる等価性 (credible equivalence)」

Teune (1990) は、解釈上のものであるにしろ、手続上のものであるにしろ、通文化比較がなされるためには、事前に、ある最低限度の測度の類似性が具体的に示されていなければならないという。

5. 等価性を確立するための諸方法

——質問紙作成の段階に焦点を合わせて——

以上においては、社会科学の諸領域で、等価性ということをめぐるさまざまな用語が用いられてきている現状に鑑みて、このような概念の「豊饒性」の問題への解決策として、いわば概念の交通整理のための一つの枠組みを提示し、それによって整理されるさまざまな用語例をそれぞれごく簡潔に解説してきた。そこで、つぎの課題は、社会調査の実践活動のなかで、いかにして等価性の確立が可能になってくるか、そしてそのための方法としては、どのようなものが利用可能であるか、について同じように先行諸研究のレビューを試みるということである。結論を先取りしていえば、等価性をめぐる用語がきわめて多様であるという、まさにその同じ線上で、そのような等価性を確立しようとする研究方法論 (research methodology) もきわめて多様であることが確認される。ここでも、文献レビューの試みのためには、何らかの交通整理のアイデアが要請されることになる。

こうして提案される一つめのアイデアが、言語学・人類学・心理学の領

域で多用されてきた「エティック／イーミック (etic / emic)」という対概念モデルの援用ということである。いうまでもなく、「文化現象について、分類のためのあらゆる基準を問題にする研究はエティック的 (比較文化的) であり、ある民族における分類の基準を問題にする研究はイーミック的 (文化内在的) な研究という」(合田濤「エティック／イーミック」『新社会学辞典』有斐閣、1993年、p. 101)。調査の質問項目に即していえば、前者は通文化的／国際的に共通に利用可能な普遍的 (universalistic) な項目であり、後者はある文化／国家において固有の意味を持つ culture-specific あるいは nation-specific な特殊的 (particularistic) な項目である。このような概念モデルをすでに述べた「解釈上の等価性」と「手続上の等価性」というもう一つの対概念と組み合わせて考えるならば、「イーミックな現象」については、そもそも「解釈上の等価性」というものは成り立つものではない。ところが、奇妙なことに、調査の実践においては、この「イーミックな現象」について「手続上の等価性」が確立されたとする例が見られるのである。たとえば、文化差を無視して、どこでも全く同じワーディングを用いるという調査がその例である。じつは、この場合、実際に「手続上の等価性」が確立されたのではなく、「イーミックな現象」が「擬似エティック (pseudoetic) な現象」として取り扱われているにすぎないのである。Berry (1969) は、このことを「無理強いされたエティックの実践 (imposed etic practice)」と呼んでいる。

方法論の交通整理のための二つめのアイディアは、これらの方法論を社会調査のいわば作業過程ともいうべきいくつかの順序・段階・位相 (phase) と組み合わせて議論していくというものである。それらは、つぎの四つである。

1. 質問項目の作成 (question development)
2. 質問紙のプリテスト (questionnaire pretesting)
3. データの収集 (data collection)
4. データの解析 (data analysis)

ここでは、とくに第一段階に焦点を合わせ、これまでの先行諸研究におけ

る等価性確立の方法をめぐる議論について簡条書式的にまとめていくことにする。

(1) 文化の専門家の調査活動への参加

ここではその参加の形態によって、さらにつぎの二つが区別される。

① 専門家の意見を聞く (expert consultation) という方法

Straus (1969) は、ある特定の文化に固有 (culture-specific) な質問項目の適切さについては、それぞれの「文化の専門家 (cultural experts)」の判断を待たなければならないという。

Henderson et al. (1992) は、調査項目に含まれるあるトピックスが、特定の文化の構成員にとって適切であるかどうかについて判断するためには、その文化の構成員自身からの意見の聴取が必要であるという。

Berry et al. (1992)、Elder (1976)、Okazaki と Sue (1995) も、それぞれ類似のアプローチを示唆している。

Flaherty et al. (1988) は、ここでいう専門家をさらに、「それぞれの文化の内容にかかわる専門家」と「社会科学の知識についての専門家」に区別した上で、専門家チームにはこれら二種類の専門家を含める必要があるという。そして、これら専門家は、一方で「質問項目の内容」と「データ収集の方法」の適切さについてレビューするとともに、他方でそれにとどまらず、実際の調査の過程において「それぞれの文化に固有な配慮 (culture-specific consideration)」がどのようなものであるかを見定めることが期待されるのである。

とくに、質問紙の翻訳については、チーム方式あるいは委員会方式というものが提案されてきている (Adams-Esquivel, 1991; Brislin, 1986; Jones と Kay, 1992; Werner と Campbell, 1970)。

さて、以上のような「専門家の意見を聞く」という方法はきわめて有用なものといえる。しかし、そのような専門家の研究活動全体における位置づけについては、その研究へのかかわりがきわめて限定されたものにとどまるということ、その立場は研究全体の流れのなかで必ずしも一貫したものとなっ

ていないということなど、さまざまな問題が指摘されてきており、ひいてはそのような研究がいわゆる「下請け研究 (hired hand research)」になっていると批判されることさえある。これは、文化の専門家を「研究分担者」として研究チームに完全に統合することなく、「研究協力者」として付属的な立場にとどめる限り、どうしても解決されない問題といえるかもしれない。

② 専門家を共同研究者として組み入れるという方法

Frey (1970) は、研究対象である文化／国家と、既存の研究技法 (research techniques) の両方について、深い知識をかねそなえた研究グループを作ることを提案している。

Van de Vijver と Hambleton (1996) も、質問項目の作成にあたって、エスノセントリックになりがちな傾向を回避するためには、マルチ・カルチュラルで、マルチ・リンガルな研究チームを構成しなければならないとしている。

Brislin (1986)、Johnson et al. (1996a)、Küchler (1987)、Triandis (1972) も同様の提案をしている。

因みに、アメリカ合衆国では、通文化比較／国際比較の研究においては、それぞれの文化的／国家的背景を持つ研究者のチームを構成することが、いわゆる連邦機関 (federal agencies) から研究助成を受けるための条件となっている。

(2) エスノグラフィック・アプローチをはじめとするさまざまな質的アプローチ (qualitative approach) の援用

Marin と Marin (1991) は、調査デザインと質問項目の作成に先立って、文化的意識 (cultural awareness) を高めるための手段として、「文化的浸礼 (cultural immersion)」「インフォーマントとの接触 (contact with informants)」「利用可能な文献への精通 (familiarity with the available literature)」などが必要であることを示唆している。

Word (1992) も、質問項目を作成するに先立って、エスノグラフィック・アプローチをとることの有用性について述べている。

確かに、エスノグラフィック・アプローチは有効な方法といわなければならない。ところが、それにもかかわらず、多くの研究者はこのアプローチを必ずしも魅力的なものとは考えていない。その最も大きな理由は、それがあまりにも時間のかかる方法であるというところにある (Ferketich, Phillips と Verran, 1993)。

そこで、時間的な余裕のない研究者に対しては、HRAF ファイル (Human Relations Area Files) —— 「民族誌資料を項目別にファイルして、通文化比較研究のための情報が容易に引き出されるよう整理した巨大データ・ベース」(松沢員子「通文化比較研究」『新社会学辞典』有斐閣、1993年、p. 1023) —— の利用が勧められている (Barry, 1980; Marsh, 1967)。

Triandis (1977) の提案した「原因—結果分析法 (antecedent-consequent method)」も質的アプローチの一つといえる。これは、被調査者に適当な語句を入れて文章を完成させてもらうことをとおして、さまざまな社会現象について、その原因と結果の観点から見た場合に、どのような通文化的な類似性と相違性が見られるかを検討することによって、その洞察 (insight) を深めようとする方法である。

文章を完成させる代わりに、カードを分類する課題 (card sorting tasks) に答えてもらうという方法もある。Johnson et al. (1997) は、この方法を用いて、多様な人種的 (multiracial) 背景を持つ人びとの社会的アイデンティティーの探究を試みた。

焦点化集団へのインタビュー (focus group interview) の方法は、大規模なサーベイ・リサーチの質問項目を考案する (formulating) 作業に豊かな洞察を提供するものといえる。

以上において取りあげることができなかった、そのほかの質的アプローチの技法については、Hines (1993) を参照されたい。

(3) 質問文のワーディングの改善策

質問文のワーディングに関する研究にはさまざまなものがある。

まず、Brislin (1986) によって提唱されてきたその「一般原理 (general

principle)」ともいうべきものをあげておこう。

1. 短く、やさしい文を使用する。
2. 受動態の文ではなく、能動態の文を使用する。
3. 代名詞ではなく、名詞を繰り返し使用する。
4. 比喩的な表現や話し言葉の文体は避ける。
5. 仮定法の使用は避ける。
6. 重要な言葉については、それを単に単語で示すだけでなく、その内容を文章で表現する。
7. 「どこで」とか、「いつ」とかについて尋ねる質問文では、副詞や前置詞の使用を避ける。
8. 所有格の使用はできるだけ避ける。
9. 抽象的な用語ではなく、具体的な用語を使用する。
10. あいまいな言葉の使用は避ける。
11. 翻訳者にとってもなじみのある言葉を使用する。
12. 二つの動詞を含む質問文の使用は避ける。

同様に、Bernard (1988) は、通文化比較調査のための質問文の作り方を提案している。

質問文のワーディングの改善策の提案は、通文化比較調査／国際比較調査における質問文の翻訳作業にも役立つものといえる。たとえば、Scheuch (1993) は、抽象的な概念は言語が異なれば、その意味に違いが出てくる可能性が高いので、その使用はできるだけ避けるべきであるという。

Prince と Mombour (1967) は、もしある二つの文化において、ある言葉の使用頻度に違いがあるとすれば、その言葉の意味は等価性のあるものとはいえず、したがってそのような言葉の使用は避けるべきであると警告している。

Warwick と Osherson (1973) は、言葉の等価性 (linguistic equivalence) を獲得するためには、そこで取りあげている文化にとって顕現性のある (salient) 事柄に注目するのが得策であるとしているが、それは「ある

概念がある文化における日常の存在 (everyday existence) と連関する度合いが大きければ大きいほど、それを表す言葉とその翻訳の難しさは少なくなる」ということが仮定されるからであるという。

Mckay et al. (1996) は、スラング (slang terms) の使用、修飾語 (modifiers) の付加、具体例の提示などは避けるべきであるとしているが、それはそれによってかえって通文化的な差異が拡大することになるからであるという。しかし、ワーディングについて、いかに工夫を凝らしたとしても、やはり文化差を除去することは困難である。このようなコンテキストにおいて、Verba et al. (1978) は、自由回答式質問 (open-ended questions) を用いて、文化を越える意味の等価性を検討する方法を提案しているのである。

(4) レスpons・スタイルにおける文化差の克服

Jones (1963) によれば、さまざまな社会において、質問紙調査ではいわゆる「礼儀バイアス (courtesy bias)」が見られる。このことは、「社会的に望ましい回答 (socially desirable responses)」を誘導するような質問は避けるべきであるということを示唆をしている。

Mitchell (1973) は、「道徳的な言葉 (moral words)」も同様の傾向を持つので、その使用は避けるべきであると述べている。

Inkeles と Smith (19974) も、同様の理由から、「賛成-反対 (agree-disagree)」のレスポンス・フォーマット (response format) の使用は避けるべきであるという。

Smith (1988) は、通文化比較調査において用いられるレスポンス・スケールの等価性を高めるためのいくつかの提案をしている。

①「あいまいな数量詞 (vague quantifiers)」を避け、「はっきりとした数値スケール (precise numerical scales)」を使うという提案である。いうまでもなく、前者はその解釈において文化差が大きく出てくる可能性があるのに対して、後者は数値は普遍的に同じ数値であるので、文化差の問題が小さくなる可能性があると考えられるからにほかならない。しかし、Smith はこの方法の問題点についても理解していた。それは、一つはこの数値スケールが

「リッカート型のスケール (Likert-type scale)」にくらべて、より複雑であるという技法上の問題ではあり、もう一つはそれぞれの文化において数値情報 (numeric information) の意味は決して同じではないという文化差の問題である。

②「単純な二分法のレスポンス・オプション (simple dichotomous responses options)」の使用という提案である。それは、「伝統的な順序レスポンス・スケール (traditional ordinal response scales)」にくらべて、誤解の余地がより少ないという理由にもとづくものである。同じ線上で、「明確な中間点をもつ左右対称の二極スケール (symmetrical, bipolar scales with a clear middle point)」の使用を勧めている (Smith, 1997)。

(5) 翻訳技法の開発

質問紙の翻訳のプロセスについて検討するためには、まず「原版言語質問紙 (Source/Master Language Questionnaire: SLQ)」と「目標言語質問紙 (Target/Translated Language Questionnaire: TLQ)」の区別が有効であろう。前者は調査の企画者によって作成される質問紙であり、後者はそれがそれぞれの調査対象文化／国家に適合するように、それぞれの使用言語に翻訳されたものをいう。これまでの多くの通文化比較調査／国際比較調査においては、一般に、前者から後者への「単純な一方的な翻訳 (simple, unidirectional translation)」が当たり前のこととされてきた。しかし、このような翻訳の方法により疑問の声が投げかけられるようになり、今ではもはやそれは容認される方法とはいえなくなってきた。以下では、こうしてそれに代わるものとして提案されてきた、いくつかの方法について取りあげる。

①逆翻訳 (back-translation) の技法

逆翻訳という技法は、すでに共通の関心事となっており (Brislin, 1970; 1976; 1986)、多種多様のものが考案されてきている (Anderson, 1967; Frey, 1970; Marin と Marin, 1991)。それは、まずバイリンガルの人が SLQ をほかの言語に翻訳し、その後同じくバイリンガルの別の人が、はじめの翻訳作業とは全く無関係に、それをもとの言語に翻訳し直し、両者を比較検討し、必

要な改訂をほどこすか、あるいは両者に見られる差異が小さなものであるならば、その翻訳はそのままで受容しようと判断するという手続きである。

しかし、この「逆翻訳の技法」についても、さまざまな批判が展開されてきた。たとえば、逆翻訳の技法は「擬似語彙論的等価性 (spurious lexical equivalence) を証明することによって、翻訳の安全性についての誤った感覚 (a false sense) を植え付ける」という警告がなされている。

やや異なる観点から、Brislin, Lonner と Thorndike (1973) は、翻訳者の問題について論じている。それは、翻訳者が一方で通文化的な翻訳作業にかかわる方法論的な問題関心を持っていないということであり、他方でその翻訳に取りあげている問題についての社会的な経験 (experience) を持ってないというものである。

もっとも、Sperber, DeVellis と Boehlecke (1994) の、つぎのようなポジティブな見方があることも記しておかなければならない。それは、熟練した翻訳者であれば、ワーディングにやや問題がある質問紙でさえ、立派な質問紙へと完成させることができるというものである。

②脱中心化 (decentering) の技法

Werner と Campbell (1970) は、質問紙の翻訳を二つの形態に区別している。一つは「対称的 (symmetrical) な翻訳」であり、もう一つは「非対称的 (asymmetrical) な翻訳」である。これまでに開発されてきた翻訳の技法は、「一方向的な翻訳」ばかりでなく、「逆翻訳」についてさえ、「非対称的な翻訳」あるいは「一中心的な翻訳」という性格づけがなされる。いうまでもなく、これらの技法においては、どこまでも SLQ を基準・原型・中心として、翻訳をいかにしてそれに近づけるかがポイントとされるからである。これに対して、「脱中心化の翻訳」あるいは「対称的な翻訳」というのは、SLQ と TLQ のいずれか一方を基準・原型、中心に置くのではなく、そのいずれをも生かしながら、両者の核心的な意味 (kernel meaning) が一致 (concordance) するまで翻訳と逆翻訳の作業を繰り返すことによって、新しい質問紙の作成をめざすという技法である。こうして、この技法は「解釈上の等価性」を達成する可能性の最も高いアプローチであるということが

できるのである。

③逆翻訳の一変種ともいうべき技法

Anderson (1967) の提案した逆翻訳の一変種 (a variation) ともいうべき技法は、つぎのようなものである。バイリンガルの翻訳者からなる複数のグループを作り、それらのグループそれぞれが独自に SLQ と TLQ の両方について、複数の代替可能な質問紙を作成するというもので、こうして作成された何種類もの質問紙からランダムに選ばれた質問紙を、被調査者からこれまたランダムに選ばれたサブ・サンプルのグループに対して使用するならば、確かにコストのかかる方法ではあるが、使用される言語、翻訳の仕方、翻訳者の個人的特性 (personal idiosyncrasies) など翻訳のプロセスに介在するさまざまな要因の影響をランダムにすることができるという技法である。

④翻訳技法の近年の動向

Sperber, DeVellis と Boehlecke (1994) は、つぎのような技法を提案している。それは、「SLQ」と「TLQから逆翻訳された質問紙」の両方を量的に評価しようとする試みで、そのためにいわば「特定領域エキスパート」ともいうべき人たち (substantive experts : ここでの例でいえば医学部の教員と学生) に、上述の二つの質問紙がどのくらい代替可能であるかについて判断してもらうという技法である。

Van de Vijver と Hambleton (1996) は、心理学的なテストとその質問紙の翻訳のための実践的ガイドライン (practical guideline) を提案したが、これも同じ線上の試みといえよう。

(6) ファセット・アプローチの援用

ファセット・アプローチは L. Guttman によって考案された独自のアイディアであり、実証科学のこの領域における一つの到達点を示す方法論的な提案といえることができる (Shye, 1978; Canter, 1985; Levy, 1994)。しかし、ここではその基本的な考え方について詳細に解説するだけの紙面の余裕がない。この点については、真鍋一史『社会・世論調査のデータ解析』(慶應義塾大学出版会、1993年) を参照されたい。

このファセット・アプローチが、近年、等価性のある質問項目の作成のための一方法として提案された (Borg, 1996)。それは、質問項目の「共有された刺激 (shared stimulus)」という側面よりも、「共有された意味 (shared meaning)」という側面に焦点を合わせるアプローチであり、そのような意味の諸次元 (dimensions)、つまり諸ファセット (facets) ——そしてさらにそれぞれのファセットのエレメント——をさまざまな文化／国家を越えて確認する (identifying) のに有効なアプローチである。

Borg (1996) は、さらにつぎのような利点と問題点をあげている。前者は通文化比較調査／国際比較調査で用いられる質問諸項目を体系的に分類・整理することができる、質問諸項目間の関係の概念的構造 (conceptual structure) のモデルを構成することができるなどであり、後者はファセット・アプローチの持つ複雑性、専門性、抽象性という問題点で、このアプローチの援用のためには、まずその全体像の把握が必要となるが、それが必ずしも容易ではないということである。

Borg (1996) は、ファセット・アプローチが質問紙の翻訳の過程で、いかに有効に利用されるかを示した一つの実証的な研究例を提示している。

6. おわりに

以上において、近年、さまざまな理論的・実証的研究がなされるようになってきた通文化比較調査／国際比較調査に注目し、これらの諸研究における最も重要な課題の一つが「等価性の追求」ということであると考え、このような問題に関して、T. P. Johnson (1998) にもとづきながら、先行諸研究の成果のインベントリィ (在庫目録) を検討することから、筆者による研究を出発させた。いうまでもなく、研究の最終目標は、このような先行諸研究の成果を踏まえて、独自の方法を開発するとともに、このような方法にもとづいて通文化比較調査／国際比較調査を実施するというにある。

しかし、このような研究過程も、実際には、それが「単線的」——つまり「段階的」——でなければならない理由はない。事実、筆者はこれまでのこの

ような研究領域において、方法論をめぐる「問題の提起」と「方法の開発」と「調査の実施」を「複線的」——つまり「同時並行的」——に行ってきた（真鍋一史『国際比較調査の方法と解析』慶應義塾大学出版会、2003年）。こうして、今回のレビュー論文は、いわば「振り出しに戻る」試みということもできる。研究過程論（cf. 田中一『研究過程論』北海道大学図書刊行会、1988年）の視座からするならば、このような「往復運動」はやはり必要なものといわなければならない。それは、比喩的にいえば、そのような「往復運動」をとおして、「方法の開発」「調査の実施」「データの解析」のそれぞれにかかわる「知の蓄積」が螺旋的に拡大していくことが期待されるからにほかならない。

今回の文献レビューの作業については、紙面の関係で割愛せざるをえなかった部分もある。それは、等価性の確立のための方法論の議論を「質問紙作成の段階」に限らざるをえなかったということである。いうまでもなく「調査プリテストの段階」「データ収集の段階」「データ解析の段階」についても、それぞれ重要な議論がなされてきている。それらの整理の作業については他日を期したいと考えている。

付記

この小論は、21世紀 COE プログラム『人類の幸福に資する社会調査の研究』（関西学院大学大学院社会学研究科）を構成する指定研究の一つである「国際比較調査の方法論的研究」の一環としてなされた文献研究にもとづくものである。

T. P. Johnson のまとめた等価性の諸「側面・属性・次元」を表現する用語例

1. *Calibration Equivalence* — Mullen (1995)
2. *Complete Equivalence* — Verba et al. (1978)
3. *Conceptual Equivalence* — Adams-Esquivel (1991); Elder (1976); Eyton and Neuwirth (1984) Flaherty et al. (1988); Green and White (1976); Hines (1993); Hui and Triandis (1985); Kohn and Slomczynski (1990); Miller et al. (1981); Mitchell (1973); Narula (1990); Okazaki and Sue (1995); Sears (1961); Sechrest et al. (1972); Singh (1995); Straus

- (1969); Warwick and Osherson (1973)
4. *Construct Equivalence* — Singh (1995); Van de Vijver and Leung (1997)
 5. *Construct Operationalization Equivalence* — Hui and Triandis (1983)
 6. *Content Equivalence* — Flaherty et al. (1988)
 7. *Contextual Equivalence* — Elder (1973)
 8. *Credible Equivalence* — Teune (1990)
 9. *Criterion Equivalence* — Flaherty et al. (1988)
 10. *Cross-Cultural Equivalence* — Devins et al. (1997); Hui and Triandis (1985); Hui et al. (1983)
 11. *Cultural Equivalence* — Devins et al. (1997)
 12. *Definitional Equivalence* — Eyton and Neuwirth (1984)
 13. *Direct Equivalence* — Frey (1970)
 14. *Exact Equivalence* — Verba et al. (1978)
 15. *Experiential Equivalence* — Sechrest et al. (1972)
 16. *Factor Equivalence* — Dressler et al. (1991)
 17. *Factorial Equivalence* — Singh (1995)
 18. *Formal Equivalence* — Frey (1970); Marsh (1967); Miller et al. (1985); Mohler et al. (1996)
 19. *Functional Equivalence* — Alwin et al. (1994); Allerbeck (1977); Berry (1969); Czudnowski (1976); Frey (1970); Frijda and Jahoda (1966); Green and White (1976); Hui and Triandis (1983; 1985); Marsh (1967); Mitchell (1973); Niessen (1982); Pareek and Pao (1980); Peschar (1982); Scheuch (1993); Sekaran (1983); Singh (1995); Teune (1990); Van de Vijver and Poortinga (1982); Verba (1969); Verba et al. (1978)
 20. *Grammatical-Syntactical Equivalence* — Schrest et al. (1972)
 21. *Indicator Equivalence* — Kuchler (1987)
 22. *Idiomatic Equivalence* — Sechrest et al. (1972)
 23. *Instrument Equivalence* — Frey (1970); Green and White (1976); Singh (1995)
 24. *Item Equivalence* — Borg (1996); Hui and Triandis (1983; 1985); Mohler
 25. *Lexical Equivalence* — Blumer and Warwick (1993); Deutscher (1973); Elder (1973); Warwick and Osherson (1973)

26. *Linguistic Equivalence* — Berry et al. (1992); Ellis et al. (1989); Hines (1993); Hulin (1987); Iyengar (1993); Kohn and Slomczynski (1990); Okazaki and Sue (1995); Prince and Mombour (1967); Sechrest et al. (1972); Warwich and Osherson (1973)
27. *Literal Equivalence* — Frijda and Jahoba (1966)
28. *Meaning Equivalence* — Prince and Mombour (1967)
29. *Measurement Equivalence* — de Vera (1985); Drasgow and Kanfer (1985); Dressler et al. (1991); Ellis et al. (1989); Green and White (1976); Hui et al. (1983); Iyengar (1993); Leung and Drasgow (1986); Mullen (1995); Poortinga (1989); Singh (1995); Straus (1969)
30. *Measurement Unit Equivalence* — Van de Vijver and Leung (1996)
31. *Metaphorical Equivalence* — Dunnigan et al. (1993)
32. *Metric Equivalence* — Hui and Triandis (1983); Leung and Bond (1989); Mullen (1995); Okazaki and Sue (1995); Straus (1969); Van de Vijver and Leung (1996); Van de Vijver and Poortinga (1982)
33. *Motivational Equivalence* — Triandis (1972)
34. *Operational Equivalence* — Mohler et al. (1996); Narula (1990); Prince and Mombour (1967)
35. *Psychological Equivalence* — Eckensberger (1973)
36. *Psychometric Equivalence* — Devins et al. (1997); Ellis et al. (1989); Hulin (1987); Van de Vijver and Poortinga (1982)
37. *Relational Equivalence* — Ellis et al. (1989)
38. *Relative Equivalence* — Erey (1970)
39. *Response Equivalence* — Anderson (1967); Frey (1970); Sekaran (1983)
40. *Scala Equivalence* — Hui and Triandis (1983; 1985); Mullen (1995); Van de Vijver and Leung (1996); Van de Vijver and Poortinga (1982)
41. *Semantic Equivalence* — Flaherty et al. (1988); Kleinman (1987)
42. *Situational Equivalence* — Anderson (1967)
43. *Stimulus Equivalence* — Anderson (1967); Verba et al. (1978)
44. *Structural Equivalence* — Van de Vijver and Leung (1996); Watkins (1989)
45. *Substantive Equivalence* — Czudnowski (1976)
46. *Syntactic Equivalence* — Kohn and Slomczynski (1990)

47. *Technical Equivalence* — Flaherty et al. (1988)
48. *Text Equivalence* — Alwin et al. (1994)
49. *Theoretical Equivalence* — Teune (1977; 1990)
50. *Translation Equivalence* — Anderson (1967); Berry et al. (1992); Candell and Hulin (1987); Hui and Triandis (1983); Hulin (1987); Mullen (1995)
51. *Verbal Equivalence* — Adams-Esquivel (1991)
52. *Vocabulary Equivalence* — Sechrest et al. (1972)

〈文献〉

- Adams-Esquivel, H. (1991). Conceptual Adaptation vs. Back-Translation of Multilingual Instruments: How to increase the accuracy and actionability of multilingual surveys. Paper presented at the annual meeting of the American Association for Public Opinion Research, Phoenix, AZ.
- Allerbeck, K. R. (1977). Analysis and Inference in Cross-National Survey Research In: A. Szalai and R. Petrella (eds.), *Cross-National Comparative Survey Research: Theory and Practice* (pp. 373-402). Oxford: Pergamon.
- Alwin, D. F., Braun, M., Harkness, J. A. and Scott, J. (1994). Measurement in Multi-National Surveys. In: I. Borg and P. Ph. Mohler (eds.), *Trends and Perspectives in Empirical Social Research* (pp. 26-39). Berlin: de Gruyter.
- Anderson, R. B. (1967). On the Comparability of Meaningful Stimuli in Cross-Cultural Research. *Sociometry* 30: 124-136.
- Aquilino, W. and LoSciuto, L. (1990). Effects of Interview Mode on the Validity of Drug Use Surveys. *Public Opinion Quarterly* 54: 362-395.
- Barry, H. (1980). Description and Uses of the Human Relations Area Files. In: H. C. Triandis and J. W. Berry (eds.), *Handbook of Cross-Cultural Psychology: Methodology* (vol. 2, pp. 445-478). Boston: Allyn and Bacon.
- Berry, J. W. (1969). On Cross-Cultural Comparability. *International Journal of Psychology* 4: 119-128.
- Berry, J. W., Poortinga, Y. H., Segall, M. H. and Dasen, P. R. (1992). *Cross-Cultural Psychology: Research and Applications*. New York: Cam-

- bridge University Press.
- Bernard, H. R. (1988). *Research Methods in Cultural Anthropology*. Newbury Park, CA: Sage.
- Bloom, D. and Padilla, A. M. (1979). A Peer Interviewer Model in Conducting Surveys among Mexican-American Youth. *Journal of Community Psychology* 7: 129-136.
- Blumer, M. and Warwick, D. P. (1993). *Social Research in Developing Countries: Surveys and Censuses in the Third World*. London: John Wiley & Sons.
- Borg, I. (1996). Using Facet Theory to Control Item Content in Cross-Cultural Surveys. Paper presented at the International Sociological Association Conference on Social Science Methodology, Colchester.
- Brislin, R. W. (1970). Back-Translation for Cross-Cultural Research. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 1: 195-216.
- Brislin, R. W. (1976). *Translation: Applications and Research*. New York: John Wiley & Sons.
- Brislin, R. W. (1986). The Wording and Translation of Research Instruments. In: W. J. Lonner and J. W. Berry (eds.), *Field Methods in Cross-Cultural Research* (pp. 137-164). Beverly Hills, CA: Sage.
- Brislin, R. W., Lonner, W. J. and Thorndike, R. M. (1973). *Cross-Cultural Research Methods*. New York: John Wiley & Sons.
- Candell, G. L. and Hulin. C. L. (1987). Cross-Language and Cross-Cultural Comparisons in Scale Translations: Independent sources of information about item nonequivalence. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 17: 417-440.
- Canter, D. (ed.) (1985). *Facet Theory: Approaches to Social Research*. New York: Springer-Verlag.
- Collins, M. (1980). Interviewer Variability: A review of the problem. *Journal of the Market Research Society* 22: 77-95.
- Couper, M. P. (1994). Modeling Survey Participation at the Interviewer Level. In: *Proceedings of the Section on Survey Research Methods* (pp. 98-107). American Statistical Association.
- Czudnowski, M. M. (1976). *Comparing Political Behavior*. Beverly Hills, CA: Sage.

- Davidson, A. R., Jaccard, J. J., Triandis, H. C., Morales, M. L. and Diaz-Guerrero, R. (1976). Cross-Cultural Model Testing: Toward a solution of the etic-emic dilemma. *International Journal of Psychology 11*: 1-13.
- Deutscher, I. (1973). Asking Questions Cross-Culturally: Some problems of linguistic comparability. In: D. P. Warwick and S. Osherson (eds.), *Comparative Research Methods* (pp.163-186). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Devins, G. M., Beiser, M., Dion, R., Pelletier, L. G. and Edwards, R. G. (1997). Cross-Cultural Measurements of Psychological Well-Being: Psychometric equivalence of Cantonese, Vietnamese, and Laotian translations of the affect balance scale. *American Journal of Public Health 87*: 794-799.
- Drasgow, F. and Kanfer, R. (1985). Equivalence of Psychological Measurement in Heterogeneous Populations. *Journal of Applied Psychology 70*: 662-680.
- Dressler, W. M., Viteri, F. E., Chavez, A., Grell, G. A. C. and Dos Santos, J. E. (1991). Comparative Research in Social Epidemiology: Measurement Issues. *Ethnicity and Disease 1*: 379-393.
- Dunnigan T., McNall, M. and Mortimer, J. T. (1993). The Problem of Metaphorical Nonequivalence in Cross-Cultural Survey Research. *Journal of Cross-Cultural Psychology 24*: 344-365.
- Eckensberger, L. H. (1973). Methodological Issues of Cross-Cultural Research in Developmental Psychology In: J. R. Nesselroade and H. W. Reese (eds.), *Life-Span Developmental Psychology: Methodological Issue* (pp. 43-64). New York: Academic Press.
- Elder, J. W. (1973). Problems of Cross-Cultural Methodology: Instrumentation and interviewing in India. In: M. Armer and A. D. Grimshaw (eds.), *Comparative Social Research: Methodological Problems and Strategies* (pp. 119-144). New York: John Wiley & Sons.
- Elder, J. W. (1976). Comparative Cross-National Methodology. In: A. Inkeles, J. Coleman and N. Smelser (eds.), *Annual Review of Sociology* vol. 2, pp. 209-230). Palo Alto, CA: Annual Reviews, Inc.
- Ellis, B. B., Minsel, B. and Becker, P. (1989). Evaluation of Attitude Survey

- Translations: An investigation using item response theory. *International Journal of Psychology* 24: 665-684.
- Eyton, J. and Neuwirth, G. (1984). Cross-Cultural Validity: Ethnocentrism in health studies with special reference of the Vietnamese. *Social Science and Medicine* 5: 447-453.
- Ferketich, S., Phillips, L. and Verran, J. (1993). Development and Administration of a Survey Instrument for Cross-Cultural Research. *Research in Nursing & Health* 16: 227-230.
- Flaherty, J. A., Gaviria, M., Pathak, D., Mitchell, T., Wintrob, R., Richman, J. A. and Birz, S. (1988). Developing Instruments for Cross-Cultural Psychiatric Research. *Journal of Nervous and Mental Disease* 176: 257-263.
- Freeman, J. and Butler, E. W. (1976). Some Sources of Interviewer Variance in Surveys. *Public Opinion Quarterly* 40: 79-92.
- Frey, F. W. (1970). Cross-Cultural Survey Research in Political In: R. T. Holt and J. E. Turner (eds.), *The Methodology of Comparative Research* (pp. 173-294). New York: Free Press.
- Frijda, N. and Jahoda, G. (1966). On the Scope and Methods of Cross-Cultural Research. *International Journal of Psychology* 1: 109-127.
- Funkhouser, G. R. (1993). A Self-Anchoring Instrument and Analytical Procedure for Reducing Cultural Bias in Cross-Cultural Research. *The Journal of Social Psychology* 133: 661-673.
- Green, R. T. and White, P. D. (1976). Methodological Considerations in Cross-National Consumer Research. *Journal of International Business Studies* 7: 81-87.
- Hanna, W. J. and Hanna, J. L. (1996). The Problem of Ethnicity and Factionalism in African Survey Research. *Public Opinion Quarterly* 30: 290-294.
- Harari, O. and Beaty, D. (1990). On the Folly of Relying Solely on a Questionnaire Methodology in Cross-Cultural Research. *Journal of Managerial Issues* 11: 267-281.
- Harkness, J. A. (1996). Thinking Aloud about Survey Translation. Paper presented at the International Sociological Association Conference on Social Science Methodology, Colchester.

- Hayashi, C., Suzuki, T. and Sasaki, M. (1992). *Data Analysis for Comparative Social Research: International Perspectives*. Amsterdam: North-Holland.
- Henderson, D. J., Sampsel, C., Mayes, F. and Oakley, D. (1992). Toward Culturally Sensitive Research in a Multicultural Society. *Health Care for Women International 13*: 339-350.
- Hines, A. M. (1993). Linking Qualitative and Quantitative Methods in Cross-Cultural Survey Research: Techniques from cognitive science. *American Journal of Community Psychology 21*: 729-746.
- Hui, C. H., Drasgow, F. and Chang, B. H. (1983). An Analysis of the Modernity Scale: An item response theory approach. *Journal of Cross-Cultural Psychology 14*: 259-278.
- Hui, C. H. and Triandis, H. C. (1983). Multistrategy Approach to Cross-Cultural Research: The case of locus of control. *Journal of Cross-Cultural Psychology 14*: 65-83.
- Hui, C. H. and Triandis, H. C. (1985). Measurement in Cross-Cultural Psychology: A review and comparison of strategies. *Journal of Cross-Cultural Psychology 156*: 131-152.
- Hulin, C. L. (1987). A Psychometric Theory of Evaluations of Item and Scale Translations: Fidelity across languages. *Journal of Cross-Cultural Psychology 18*(2): 115-142.
- Hulin, C. L., Drasgow, M. and Komocar, J. (1982). Applications of Item Response Theory to Analysis of Attitude Scale Translations. *Journal of Applied Psychology 67*: 818-825.
- Inkeles, A. and Smith, D. H. (1974). *Becoming Modern: Individual Change in Six Developing Countries*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Iyengar, S. (1993). Assessing Linguistic Equivalence in Multilingual Surveys. In: M. Blumer and D. P. Warwick (eds.), *Social Research in Developing Countries: Surveys and Censuses in the Third World* (pp. 173-182). London: John Wiley & Sons.
- Johnson, T. P., Jobe, J., O'Rourke, D., Sudman, S., Warnecke, R., Chavez, N., Chapa-Resendez, G. and Golden, P. (1997). Dimensions of Identification among Multiracial and Multiethnic Respondents in Survey Interviews. *Evaluation Review 21*: 671-687.

- Johnson, T. P., O'Rourke, D., Chavez, N., Sudman S., Wanecke, R., Lacey, L. and Horm, J. (1996a). Cultural Variations in the Interpretation of Health Survey Questions. In: Warnecke, R. (ed.), *Health Survey Research Methods Conference Proceedings* (pp. 57-62). DHHS Publication No. (PHS) 96-1013. Hyattsville, MD: National Center for Health Statistics.
- Johnson, T. P., O'Rourke, D., Sudman, S., Warnecke, R. and Chavez, N. (1996b). Assessing Question Comprehension across Culture: Evidence from the United States. Paper presented at the International Sociological Association Conference on Social Science Methodology, Colchester.
- Johson, T. P., O'Rourke, D., Chavez, N., Sudman, S., Warnecke, R., Lacey, L. and Horm, J. (1997). Social Cognition and Responses to Survey Questions among Culturally Diverse Populations. In: L. Lyberg, P. Biemer, M. Collins, E. de Leeuw, C. Dippo, N. Schwarz and D. Trewim (eds.), *Survey Measurement and Process Quality* (pp. 87-113). New York: John Wiley & Sons.
- Jones, E. L. (1963). The Courtesy Bias in South-East Asian Surveys. *International Social Science Journal* 15: 70-76.
- Jones, E. G. and Kay, M. (1992). Instrumentation in Cross-Cultural Research. *Nursing Research* 41: 186-188.
- Jörekog, K. G. (1971). Simultaneous Factor Analysis in Several Populations. *Psychometrika* 36: 409-426.
- Katerberg, R., Smith, F. J. and Hoy, S. (1977). Language, Time, and Person Effects on Attitude Scale Translations. *Journal of Applied Psychology* 62: 385-391.
- Kleinman, A. (1987). Anthropology and Psychiatry: The role of culture in Cross-Cultural research on illness. *British Journal of Psychiatry* 151: 447-454.
- Kohn, M. L. and Slomczynski, K. M. (1990). *Social Structure and Self-Direction: A Comparative Analysis of the United States and Poland*. Cambridge, MA: Basil Blackwell.
- Kohn, M. L., Slomczynski, K. M., Janicka, K., Khmelko, V., Mach, B. W., Paniotto V., Zaborowski, W., Gutierrez, R. and Heyman, C. (1997). Social Structure and Personality under Conditions of Radical Social Change: A

- comparative analysis of Poland and Ukraine. *American Sociological Review* 62: 614-638.
- Krause, N. M. and Jay, G. M. (1994). What Do Global Self-Rated Health Items Measure? *Medical Care* 32: 930-942.
- Krosnick, J. A. (1991). Response Strategies for Coping with the Cognitive Demands of Attitude Measures in Surveys. *Applied Cognitive Psychology* 5: 213-236.
- Küchler, M. (1987). The Utility of Surveys for Cross-National Research. *Social Science Research* 16: 229-244.
- Leung, K. (1989). Cross-Cultural Differences: Individual-level vs. culture-level analysis. *International Journal of Psychology* 24: 703-719.
- Leung, K. and Bond, M. H. (1989). On the Empirical Identification of Dimensions for Cross-Cultural Comparisons. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 20: 133-151.
- Leung, K. and Drasgow, F. (1986). Relation between Self-Esteem and Delinquent Behavior in Three Ethnic Groups: An application of item response theory. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 17: 151-167.
- Levy, S. (ed.)(1994). *Louis Guttman on Theory and Methodology: Selected Writings*. Aldershot: Dartmouth.
- Marin, G. and Marin, B. (1991). *Research with Hispanic Populations*. Newbury Park, CA: Sage.
- Marin, G., Triandis, H. C., Betancourt, H. and Kashima, Y. (1983). Ethnic Affirmation versus Social Desirability: Explaining discrepancies in bilinguals' responses to a questionnaire. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 14: 173-186.
- Marsh, R. M. (1967). *Comparative Sociology: A Codification of Cross-Societal Analysis*. New York: Harcourt, Brace & World.
- McKay, R. B., Breslow, M. J., Sangster, R. L., Gabbard, S. M., Reynolds, R. W., Nakamoto, J. M. and Tarnai, J. (1996). Translating Survey Questionnaires: Lessons Learned. *New Directions for Evaluation* 70: 93-104.
- Miller, J., Slomczynski, K. M. and Kohn, M. L. (1985). Continuity of Learning Generalization: The effect of job on men's intellectual process in the United States and Poland. *American Journal of Sociology* 91: 593

-615.

- Miller, J., Slomczynski, K. M. and Schoenberg, R. J. (1981). Assessing Comparability of Measurement in Cross-National Research : Authoritarian-conservatism in different sociocultural settings. *Social Psychology Quarterly* 44: 178-191.
- Mitchell, R. E. (1973). Survey Materials Collected in the Developing Countries: Sampling, measurement, and interviewing obstacles to intra- and inter-national comparisons. In: D. P. Warwick and S. Osheson (eds.), *Comparative Research Methods* (pp.204-226). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Mohler, P. Ph., Harkness, J. A., Smith, T. W. and Davis, J. A. (1996). Calibrating Response Scales across Two Languages and Cultures. Paper presented at the International Sociological Association Conference on Social Science Methodology, Colchester.
- Mullen, M. R. (1995). Diagnosing Measurement Equivalence in Cross-National Research. *Journal of International Business Studies* 36: 573-596.
- Narula, U. (1990). Practical Constraints in Social Field Research in India. In: U. Narula and W. B. Pearce (eds.), *Cultures, Politics, and Research Programs: An International Assessment of Practical Problems in Field Research* (pp.123-149). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Nissen, M. (1982). Qualitative Aspects in Cross-National Comparative Research and the Problem of Functional Equivalence In: M. Niessen and J. Peschar (eds.), *International Comparative Research* (pp.83-104). Oxford: Pergamon Press.
- Okazaki, S. and Sue, S. (1995). Methodological Issues in Assessment Research with Ethnic Minorities. *Psychological Assessment* 7: 367-375.
- Pareek, U. and Rao, T. V. (1980). Cross-Cultural Surveys and Interviewing. In: H. C. Triandis and J. W. Berry (eds.), *Handbook of Cross-Cultural Psychology* (vol. 2, pp.127-179). Boston: Allyn and Bacon.
- Peschar, J. (1982). Quantitative Aspects in Cross-National Comparative Research: Problems and Issues. In: M. Niessen and J. Peschar (eds.), *International Comparative Research* (pp.57-81). Oxford: Pergamon Press.

- Poortinga, Y. H. (1989). Equivalence of Cross-Cultural Data: An overview of basic issues. *International Journal of Psychology* 24: 737-756.
- Prince, R. and Mombour, W. (1967). A Technique for Improving Linguistic Equivalence in Cross-Cultural Surveys. *Journal of Social Psychology* 13: 229-237.
- Przeworski, A. and Teune, H. (1966). Equivalence in Cross-National Research. *Public Opinion Quarterly* 30: 33-43.
- Przeworski, A. and Teune, H. (1970). *The Logic of Comparative Social Inquiry*. New York: John Wiley & Sons.
- Schachter, S. (1954). Interpretive and Methodological Problems of Replicated Research. *Journal of Social Issues* 10: 52-60.
- Schaeffer, N. C. (1980). Evaluating Race-of-Interviewer Effects in a National Survey. *Sociological Methods & Research* 8: 400-419.
- Scheuch, E. K. (1993). The Cross-Cultural Use of Sample Surveys: Problems of Comparability. *Historical Social Research* 18: 104-138.
- Schuman, H. (1966). The Random Probe: A technique for evaluating the validity of closed questions. *American Sociological Review* 31: 218-222.
- Schwartz, S. H. and Sagiv, L. (1995). Identifying Culture-Specifics in the Content and Structure of Values. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 26: 92-116.
- Sears, R. R. (1961). Transcultural Variables and Conceptual Equivalence In: B. Kaplan (ed.), *Studying Personality Cross-Culturally* (pp. 445-455). Evanston, IL: Row, Peterson & Co.
- Sechrest, L., Fay, T. L. and Hafeez Zaidi, S. M. (1972). Problems of Translation in Cross-Cultural Research. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 3: 41-56.
- Sekaran, U. (1983). Methodological and Theoretical Issues and Advancements in Cross-Cultural Research. *Journal of International Business Studies* 14: 61-73.
- Shye, S. (ed.) (1978). *Theory Construction and Data Analysis in the Behavioral Sciences*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- Singh, J. (1995). Measurement Issues in Cross-National Research. *Journal of International Business Studies* 26: 597-619.
- Smith, T. W. (1988). The Ups and Downs of Cross-National Survey

- Research GSS Cross-National Report No. 8. National Opinion Research Center, University of Chicago (mimeo).
- Smith, T. W. (1997). Improving Cross-National Survey Research by Measuring the Intensity of Response Categories. GSS Cross-National Report No. 17. National Opinion Research Center, University of Chicago (mimeo).
- Sperber, A. D., DeVellis, R. F. and Boehlecke, B. (1994). Cross-Cultural Translation: Methodology and validation. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 25: 501-524.
- Straus, M. A. (1969). Phenomenal Identity and Conceptual Equivalence of Measurement in Cross-National Comparative Research. *Journal of Marriage and the Family* 81: 233-239.
- Teune, H. (1977). Analysis and Interpretation in Cross-National Survey Research. In: A. Szalai and R. Petrella (eds.), *Cross-National Comparative Survey Research: Theory and Practice* (pp. 95-128). Oxford: Pergamon.
- Teune, H. (1990). Comparing Countries: Lessons Learned In: E. Øyen (ed.), *Comparative Methodology: Theory and Practice in International Social Research* (pp. 38-62). London: Sage.
- Triandis, H. C. (1972). *The Analysis of Subjective Culture*. New York: John Wiley & Sons.
- Triandis, H. C. (1977). *Interpersonal Behavior*. Monterey, CA: Brooks/Cole.
- Triandis, H. C. and Marin, G. (1983). Etic plus Emic versus Pseudoetic: A test of a basic assumption of contemporary cross-cultural psychology. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 14: 489-500.
- Van de Vijver, F. J. R and Hambleton, R. K. (1996). Translating Tests: Some practical guidelines. *European Psychology* 1: 89-99.
- Van de Vijver, F. J. R and Leung, K. (1996). Methods and Data Analysis of Comparative Research. In: J. W. Berry, Y. H. Poortinga and J. Pandey (eds.), *Handbook of Cross-Cultural Psychology* (2nd edition, vol. 1, pp. 257-300). Chicago: Allyn & Bacon.
- Van de Vijver, F. J. R and Leung, K. (1997). *Methods and Data Analysis for Cross-Cultural Research*. Thousand Oaks, CA: Sage.

- Van de Vijver, F. J. R and Poortinga, Y. H. (1982). Cross-Cultural Generalization and Universality. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 13: 387-408.
- Van de Vijver, F. J. R and Poortinga, Y. H. (1997). Towards an Integrated Analysis of Bias in Cross-Cultural Assessment. *European Journal of Psychological Assessment* 13: 29-37.
- Vera de, M. V. (1985). Establishing Cultural Relevance and Measurement Equivalence using Emic and Etic Items. Unpublished dissertation. Urbana, IL: University of Illinois.
- Verba, S. (1969). The Uses of Survey Research in the Study of Comparative Politics: Issues and strategies. In: S. Rokkan, S. Verba, J. Viet and E. Almsy (eds.), *Comparative Survey Analysis* (pp. 56-106). Paris: Mouton.
- Verba, S., Nie, N. H. and Kim, J. O. (1978). *Participation and Political Equality: A Seven-Nation Comparison*. London: Cambridge University Press.
- Warwick, D. P. and Osherson, S. (1973). *Comparative Research Methods*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Watkins, D. (1989). The Role of Confirmatory Factor Analysis in Cross-Cultural Research *International Journal of Psychology* 24: 685-701.
- Webster's Seventh New Collegiate Dictionary* (1965). Springfield MA: G. & C. Merriam Co.
- Werner, L. and Campbell, D. T. (1970). Translating, Working through Interpreters and the Problem of Decentering In: R. Naroll and R. Cohen (eds.), *American Handbook of Methods in Cultural Anthropology* (pp. 398-420). Garden City, NY: Natural History Press.
- Whiting, B. B. (1976). The Problem of the Packaged Variable. In: K. Riegel and J. Meacham (eds.), *The Developing Individual in a Changing World* (Vol. 1, pp. 303-309). The Hague: Mouton.
- Word, C. O. (1992). Cross-Cultural Methods for Survey Research in Black Urban Areas. In: A. K. H. Burlew, W. C. Banks, H. P. McAdoo and D. A. Azibo (eds.), *African American Psychology: Theory, Research, and Practice* (pp. 28-42). Newbury Park, CA: Sage.